

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



「日本の文化を理解したうえで、相手の国の文化も理解し、そして自分の意見を伝えられる若者を創りたい」。佐野学園では昭和50年代初め、佐野隆治会長の強い思いによって大学設置の準備を開始しました。開学した神田外語大学が、来るべきグローバル化の時代に先駆けて「異文化コミュニケーション」をコンセプトにできたのは、古田暁名誉教授との出会いが大きく関係していました。古田教授と神田外語の物語は、20世紀という激動の時代の幕開けとともに始まります。（構成・文：山口剛/文中敬称略）



古田暁の父、古田純三は明治33（1900）年に北海道の夕張に生まれた。純三は海外への憧れが強く、兄とともにヨーロッパに密航したという逸話も残っている。純三の父、喜代二は書籍商であり、また敬虔なキリスト教徒であった。純三も自然とキリスト教の信徒になり、日本から外国への移住を支援するプロテスタント系のキリスト教団体「日本力行会（にほんりっこうかい）」で学ぶようになる（※1）。純三も20歳ぐらいになるとアメリカの西海岸へ渡り、日本からの移民受入れに心血を注ぎ始めた。大正9（1920）年ごろのことである。

当時、海外への移民は日本にとって国家レベルの課題でもあった。江戸幕府の終焉とともに世界へと門戸を開いた日本は殖産興業をスローガンに掲げ、近代的な国家へと変貌を遂げようとしていた。人々の暮らしも変化し、衛生面が改善されると、乳児死亡率が低下し、人口が急増していった。だが、国土は限られている。農村部を地主制が支配していた時代、若者は自分の土地を持ち、作物を育てることを夢見て、北米や中南米、満州国へ渡っていった。



純三が10年にも及ぶ北米での移住支援活動を終えた後に記した著書『移住と宗教』を読むと彼のふたつの面が浮かび上がってくる。まず純三には、神がこの世界を全人類のために創ったのであれば、人々が国境を越えて移住できるはずであり、国際的で社会主義的な社会こそ理想である、という信念があった。彼はその信念に基づいて、10年にわたりアメリカで暮らしながら、情熱を持って日本人の移住活動を支援した。もうひとつは、彼がグローバルな視点を持っていたことだ。国際情勢、経済学や人口論、学者たちの発言、受入国の政策と社会背景、そして移民の精神性など多岐に渡る事象を学び、冷静に状況を分析していた。情熱と客観。行動と研究。そのふたつの能力を合わせ持つ純三の個性は、息子である古田暁に引き継がれることになる。(1/15)

1. 日本力行会は牧師の島貫兵太夫によって明治30（1897）年に設立された。

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



民族教育をなすことは、
「人間」を作るうえに絶対に必要である。

日本人の移住にかける古田純三の想いとは裏腹に、当時のアメリカでは日本人排斥が強まっていく。大正13（1924）年、アメリカ議会で排日移民法が可決。アメリカに帰化できない東洋人の入国を禁じたこの法律によって、日本人のアメリカへの移住の道は閉ざされた。

古田暁は、昭和4（1929）年2月19日、ロサンゼルスで生まれた。この年の6月、父の純三はまだ赤ん坊だった暁と家族を連れて日本に帰国した。アメリカで生まれた暁はアメリカの国籍を持つこととなった。暁が幼少期から少年期を過ごした時代、日本は国際社会との溝を深めていた。満州事変、国際連盟脱退、そして日中戦争の勃発。昭和16（1941）年12月8日には、真珠湾攻撃を行い、アメリカとの戦争状態に突入していく。それでも純三は移民支援の活動に精力を傾け、終戦になるまでアメリカ、ブラジル、中国を訪れ続けた。

アメリカに留まらず、日本に帰ってきたことは、暁の人生に大きな意味を与えた。暁は、国籍はアメリカだが、日本の風土と文化のなかで成長したのである。父の純三は、アメリカの日系移民2世の実態を通じて、文化的な環境が人の成長にどれほど大きな影響を与えるかを理解していた。



「先年シカゴ大学のパークス博士が、太平洋沿岸の各国移民の学童を研究した際、日本の二世が最も優秀である事を述べているが、日本人二世の内の不良青年の大半が日本語を解せぬことを発見し、日本人二世に日本語教育をすることの必要性を結論していたのである。（中略）かくのごとく日本語を通し、民族的教育をなすことは偏狭な「愛民族心」のなさしむるにあらず、「人間」を作るうえに絶対に必要にして、そのことを幾多の学者がこれを証明し出して来たのである」 (※2)

自らの内に日本の文化を得たことは、暁が50代になってから学び始める異文化コミュニケーションの世界でも大切な条件となっていくのだ。

(2/15)

2. 古田純三著『移住と宗教』（日本力行会、1932年）P20

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



20年にも及ぶ研究が神学者・古田暁を生み、日本に中世神学の名著の翻訳をもたらした。

昭和20（1945）年8月15日、戦争が終わった。17歳となった古田暁は慶応義塾大学経済学科の予科へ進学するが、1年も経たずして兄とともにアメリカに渡った。ふたりは、ロサンゼルスのあるカトリック系のロヨラ大学で台所の手伝いの職を得た。そこで、暁はカトリックの司祭に勉強をする価値のある人間として見いだされたという。父の務める日本力行会（にほんりっこうかい）はプロテスタントだったが、暁は自らの信教をカトリックに定めた。

アメリカ中西部のミネソタ州にあるセント・ジョンズ修道院で聖職者としての生活が始まった。この修道院は、その起源を6世紀に遡るカトリック教会で最も古いベネディクト修道会に属していた。暁は修道院での生活を続けながら、ひたすら学んでいった。附属する大学では哲学と西洋古典学を専攻した。昭和29（1954）年に哲学の学士号を取得した後、ベネディクト修道会の中心的存在であるイタリアのサンタンセルモ大学へ留学し、神学とラテン語を学んだ。アメリカに帰ってきた暁はさらに神学に関する研究を進めていく。首都・ワシントンにあるアメリカ・カトリック大学で神学の修士号、そして昭和39（1964）年には同大学で博士号を取得するのだ。博士論文のテーマは、11世紀のイギリスのスコラ哲学者、アンセルムスだった。以後、暁は40年以上にわたりアンセルムスの研究を続けることになる。





カトリックの聖職者としての研鑽を積み、また研究者としても博士となった暁は、昭和39（1964）年4月から、北海道の室蘭にある聖ベネディクト修道院で神学や聖書学を教える。18年ぶりの日本での生活だった。昭和41（1966）年の9月からはイタリアのローマ市教皇庁、いわゆるバチカンの典礼研究所に留学。キリスト教の儀式である典礼や修道院の歴史について研究した。

バチカンに辿り着いた暁は38歳となった。終戦直後に日本を離れ、カトリックの研究と祈りに身を投じてからすでに20年の月日が流れていた。その歳月で得た中世神学とラテン語の理解によって、後に『アンセルムス全集』や『聖ベネディクトの戒律』といった翻訳書が生まれることになる。日本人は、古田暁という中世キリスト教の研究者が現れたことによって、ラテン語から直接日本語へ翻訳されたこれらの名著にふれる機会を得るのである。（3/15）

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



**修道会との別離と日本での生活の始まり。
翻訳家として、編集者としての日々。**

パチカンでの研究を終えた古田暁は日本へと帰ってきた。昭和42（1967）年のことである。彼は、聖心女子大学、上智大学、慶応義塾大学といった私立大学で講師を務め哲学や宗教学、そして英語を教えた。20年間以上にわたり修道院での生活と研究を続けてきた暁は、この頃、東洋文化に回帰し、日本で生活することを決意する。パチカンとベネディクト修道会から正式な許可をもらい、修道院での生活に別れを告げたのである。そして、結婚し、家庭を持った。

聖職を離れた古田が定職を得たのは、講談社インターナショナルだった。同社は昭和38（1963）年に設立された出版社で、日本の名著を英語で翻訳出版し、世界に紹介してきた。古田暁は昭和43（1968）年9月からの約3年間、専務補佐という役職を得た。昭和46（1971）年には同社から"Journey Beyond Samarkand"が出版された。井上靖の著書『西域物語』の英訳書である。古田は日本を代表する作家が未開の地であった中央アジアの西トルキスタンの歴史と文化を紐解いた作品を英訳し、欧米に紹介したのである。

昭和46（1971）年9月からは大阪フォルム画廊の顧問となる。この画廊は、東京、名古屋、大阪に拠点を構えとともに、芸術家の作品売買を仲介するだけでなく、出版事業も手がけた意欲的なギャラリーだ。経営者の松村健は古田の西欧文化への造詣に感銘を受け、アドバイザーとしての職を依頼する。



翌年の昭和47（1972）年、大阪フォルム画廊出版部は古田の翻訳書『書物への愛 フィロビブロン』を出版した。同書は、14世紀にラテン語で書かれ、「愛書家の聖書」と呼ばれた作品だ。15世紀に印刷技術が発明されてからは、聖書に次ぐベストセラーになったと言われる。しかし、日本では翻訳されておらず、松村の勧めもあって、古田がその任を買って出たのである。

その後もこの本は、フランス装丁版（昭和53（1978）年、北洋社）、300部の限定版（昭和60（1985）年、タングラム）、そして文庫版（平成1（1989）年、講談社）として刊行され、合わせて4度にわたり出版されてきた。ラテン語から直接日本語へと翻訳された中世の書物が、時を超えて再評価し続けられていることから古田の審美眼の高さが伺えるだろう。（4/15）

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



英文日本大百科事典を編集する日々に出会った
「異文化コミュニケーション」という新しい学問。

昭和52（1977）年10月になると、古田はふたたび講談社インターナショナルで働き始める。役職は、「Kodansha Encyclopedia of Japan（『英文日本大百科事典』）」の編集主査である。この百科事典は、日本という国を英文で体系的に紹介するものであり、全9巻、英単語数400万語に及ぶ大著である。執筆する研究者は27カ国、1300名以上。費用はおよそ1500万ドル。出版当時の為替レートで34億円以上である。

編集委員には日米の著名な学者が名を連ね、アメリカ側の委員長は60年代の駐日大使だったエドウィン・O・ライシャワーが務めた。編集作業には12年間の歳月が費やされた。古田は昭和59（1984）年10月の発行までの最後の5年間に、日米の編集者たちをとりまとめる編集主査として参画した。

「Encyclopedia of Japan」の編集業務を続けながらも、古田は『アンセルムス全集』など中世の神学や哲学に関する翻訳を続け、大学でも教鞭を執った。昭和55（1980）年から56（1981）年にかけては国際基督教大学で非常勤講師として東洋倫理を教えた。同大学では古田と時期を同じくして、エドワード・C・スチュワートというアメリカ人が客員教授として教え始めた。スチュワートは1960年代から70年代にかけてアメリカで新しい学問の分野として生まれた「異文化コミュニケーション（Intercultural Communication）」の領域を開拓してきた研究者であった。古田は大学でスチュワートと出会い、異文化コミュニケーションという学問の存在を知る。





スチュワートの活動は大学内に留まらなかった。当時のことを知る人物に立教大学異文化コミュニケーション学部特任教授の久米昭元がいる。久米は、平成12（2000）年まで神田外語大学で異文化コミュニケーションを教え、後述する異文化コミュニケーション研究所でも副所長を務めていた人物である。久米が留学先のミネソタ大学でスチュワートに出会ったのは昭和52（1977）年に遡る。久米は帰国後、スチュワートの著書“American Cultural Patterns”を『アメリカ人の思考法 文化摩擦とコミュニケーション』（昭和57（1982）年、創元社）として翻訳出版した。スチュワートと縁があった久米は南山大学で教鞭を執っていた昭和58（1983）年ごろにある会合に招かれた。（5/15）

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



**今後の日本は、明治維新にも匹敵する比類ない
コミュニケーション能力の発展を必要としている。**

「会合にはスチュワート先生の呼びかけで、異文化コミュニケーションの重要性を認識している研究者たちが集まっていました。議論のテーマは今後の日本をどうしていくかというもの。当時は政治もおかしくなり、国際的な問題も起きていた。スチュワート先生は、日本の社会構造のなかに異文化コミュニケーションを組み込んでいかなければと強く想われていました」 (久米昭元)

1983年といえば自動車や半導体など、日米貿易摩擦が熾烈さを増していた時期である。「アメリカ人の思考法」の前文を読むと、スチュワートが日本の状況を危惧し、コミュニケーションこそが解決策だと考えていたことが分かる。

「日本の産業界と政府の指導者は、交渉とコミュニケーションにおける望ましいスタイルを育み、海外における日本の利益を効果的に代表し、それに伴って日本文化の意義を伝えていかなければならない。(中略) 今後の日本は、明治維新にも匹敵する比類ないコミュニケーション能力の発展を必要としている。」 (※3)

久米は、この会合で初めて古田暁に出会った。スチュワートとの出会いを通じて異文化コミュニケーションという学問を知った古田は、日本に異文化コミュニケーションという考え方を広めていくことが重要であると感じていたようだ。会合で古田に出会った久米は、当時の古田の考えをこう説明する。



「戦いのない世界をつくるには、相手の価値観や考え方が全然違って
も、最終的には受け入れる必要があります。受け入れてなんとか一緒に
うまくやっていくのが、異文化コミュニケーションを成立させる条件で
す。異文化コミュニケーションという学問は平和学に近い。平和を研究
するには戦争の研究をする。我々も（異文化との）誤解や軋轢を調べな
がら、相手とよい関係性を持つ方法を研究しています。古田先生は日本
でもそういう学問が絶対に必要だと感じられていました。異文化コミュ
ニケーションの大学を作らなければいけない、という理想をお持ちだっ
たと思います」（6/15）

3. エドワード・C・スチュワート著、久米昭元訳『アメリカ人の思考法 文
化摩擦とコミュニケーション』（創元社、1982年）P ix(ページix)

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



**大学新設にかける佐野隆治の強い思い。
古田と出会い、「この人しかいない」と直観した。**

古田が“Encyclopedia of Japan”の編集業務に追われながらも、異文化コミュニケーションについての研究を続けていた昭和58（1983）年、神田外語学院の事務長である佐野隆治は大学の設置に向けて準備をすすめていた。だが、その道は困難を極めた。当時、文部省は大学の新設を認めないという方針を打ち出していたのである。だが、引き下がるわけにはいかない。

佐野には大学設置にかけるある思いがあった。「日本の文化を理解したうえで、相手の国の文化も理解し、そして自分の意見を伝えられる若者を創りたい」。そのためには従来の外国語教育では不十分だ。そして大学の新設を認めない文部省が首を縦に振る何かが必要だった。佐野は敏感にアンテナを張っていくなかで、「異文化コミュニケーション」という言葉に出会った。佐野はこの分野の専門家を探すよう学院の教務課長の山本和男に指示をした。

山本はこの耳慣れない学問の専門家を探すべく、手当たり次第に関係者を尋ね歩いた。現在、大阪商業大学の教授を務めている鋤柄光明にも会いに行った。アメリカの大学に幅広い人脈を持っていた鋤柄は山本の問いに、「異文化コミュニケーションの日本における専門家は古田暁をおいてほかにはいない」と断言した。山本は講談社インターナショナルで働く古田にコンタクトし、すぐに会いに行った。山本は古田に初めて会った時のことをこう振り返る。





「古田先生は心身ともに疲れきっていました。世界中の学者と渡り合いながら百科事典を作るのはとても辛い作業だったのでしょね。仕事のなかで異文化コミュニケーションの重要性を痛感されていたようです。先生は異文化コミュニケーションについて話をしてくれました。僕は異文化コミュニケーションについてはまったく知らなかった。でも、先生の話をしているうちにどんどん引き込まれていった。すごい人に出会えたと思いましたね」

山本はその日のうちに佐野隆治に古田を会わせる段取りを組んだ。古田に会った佐野は「この人しかいない！」と直観した。古田に大学への参画を要請し、古田もこれを引き受けた。この時期、古田は講談社での仕事のゴールが見えていたが、再就職先が決まっておらず、アメリカに帰ることも考えていた状況だった。佐野学園は間一髪のところまで古田と出会えたのである。(7/15)

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



古田の培ってきた広大な人的ネットワークが個性豊かな一般教育と研究所の活動を可能にした。

佐野隆治と古田暁は昭和59（1984）年3月に、「異文化コミュニケーション研究所」の設立で合意する。そして、後に神田外語大学の骨格となる「太平洋圏の時代構想」もこのときに打ち立てられた。5月、佐野学園の所属研究機関として東京・神田に異文化コミュニケーション研究所が発足した。異文化コミュニケーションに関する日本で初めての研究所の設立である。

古田が研究所所長に就任し、佐野学園の一員となったことで、大学設置申請が一気に真実味を帯びてきた。古田は膨大な人的ネットワークを持っていた。まず、中世神学の専門家としてキリスト教系の大学の教員からは高い評価を得ていた。そして、「Encyclopedia of Japan」では編集者という立場で、国内のあらゆる分野の研究者たちと交流していた。この幅広い人脈によって大学設立に向けて一般教育の教員たちを集める目処が立ったのである。佐野隆治は当時を振り返ってこう語る。

「外国語に関しては（初代学長の）小川先生に任せていた。でも、大学を創るには一般教育の先生が必要になるし、揃わなければ申請もできない。古田先生に出会えたから、これで大学が創れると本気で思えたんですよ」





古田は大学設置のための準備を行う一方で、異文化コミュニケーション研究所の活動も本格的に開始する。まず、研究所の活動領域を「啓蒙」「研究」「教育」の3分野に定めた。立ち上げ当初は、大学設立の社会的な背景を創るためにも啓蒙活動に比重が置かれた。記録に残る最初のイベントは、昭和59（1984）年11月に開催された『国際シンポジウム 日本の国際化に果たす教育の役割』である。

昭和60（1985）年になると神田外語学院の講堂で講演会シリーズを開始した。12月20日に開催された第1回の講師はコロンビア大学教授の دونالد・キーンだった。日本の文化を欧米に広く紹介した日本文学研究の第一人者である。昭和63（1988）年度までの4年間で25回もの講演会が開催され、文化やコミュニケーションの分野で著名な研究者たちが次々と登壇した。ここでも古田の幅広い人脈が遺憾なく発揮されたのである。（8/15）

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



叶わなかった「異文化コミュニケーション大学」の夢。
だが、本当の「運動」はそれからだった。

研究所での活動を始めた頃の古田暁に会った久米昭元は当時をこう振り返る。

「古田先生は、『若い人の頭のなかを柔軟にするために異文化コミュニケーションを教えなければならない』とお考えになっていました。その人たちが育ち、社会に出れば、社会をよくしていけるはずだと。だから、教育については熱心でした。また、新しいことで世の中にインパクトを与えるために研究所を作られたようです。当時の先生は、『外語大学ではなく、「神田異文化コミュニケーション大学」のような大学にしたいんだ』とおっしゃっていました」

古田は異文化コミュニケーションを広める研究所の啓蒙活動として、出版事業にも力を入れた。大学開学の直前の昭和62（1987）年3月20日、古田が監修した『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件』が出版された。出版社は有斐閣。六法全書や判例集、経済辞典などに代表される評価が定まった分野の本を出している固い出版社である。古田は以前、有斐閣から中世の神学や哲学に関する共著書を出している。その編集者である新井宣淑に、古田は異文化コミュニケーションの学問としての重要性を説いたのである。



昭和62（1987）年4月、神田外語大学が開学した。文部省は、大学名としても、学部学科名としても、外来語の入った「異文化コミュニケーション」という言葉を使うことは認めなかった。佐野隆治と古田暁がともに描いた「神田異文化コミュニケーション大学」の夢は叶わなかった。だが、神田外語大学の異文化コミュニケーション教育、そして異文化コミュニケーション研究所の活動は失速するどころか、ここから本当の「運動」を始めるのである。（9/15）

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



**すべての学科共通の必修科目を設け、
全学生に異文化の理解の本質を学ばせる。**

神田外語大学では開学当初から異文化コミュニケーションを中心としたカリキュラムが組まれた。古田暁は英語やスペイン語、韓国語、中国語の各学科の教授たちと話し合い、すべての学科の学生が「基礎教育科目」として「日本研究」「コミュニケーション論」「国際理解」という三つの領域を学ぶカリキュラムを組んだ。そのうち、「日本倫理思想史」「コミュニケーション論」「異文化間コミュニケーション」の3科目は必修となった。日本の思想と、異文化とのコミュニケーションの両方を学ぶという理念がカリキュラムとして結実したのである。



開学2年目からスタートした「異文化間コミュニケーション」の講義は古田暁からの強い誘いを受けて神戸市外国語大学から転職した久米昭元が担当した。久米が担当した異文化コミュニケーションの授業ではビデオを活用した。例えば、大学の外国人教員に日本の学生について感じていることをインタビューし、録画した。外国人教員から『なぜ、日本の学生は質問しても手を上げないのか？ 自分の国では学生はもっと積極的だった』という意見が出る。その映像を観て、学生は教員たちの異文化を理解できる。座学が中心の講義のなかで、学生たちが異文化理解を感覚的に捉えられるような工夫を凝らしたのである。

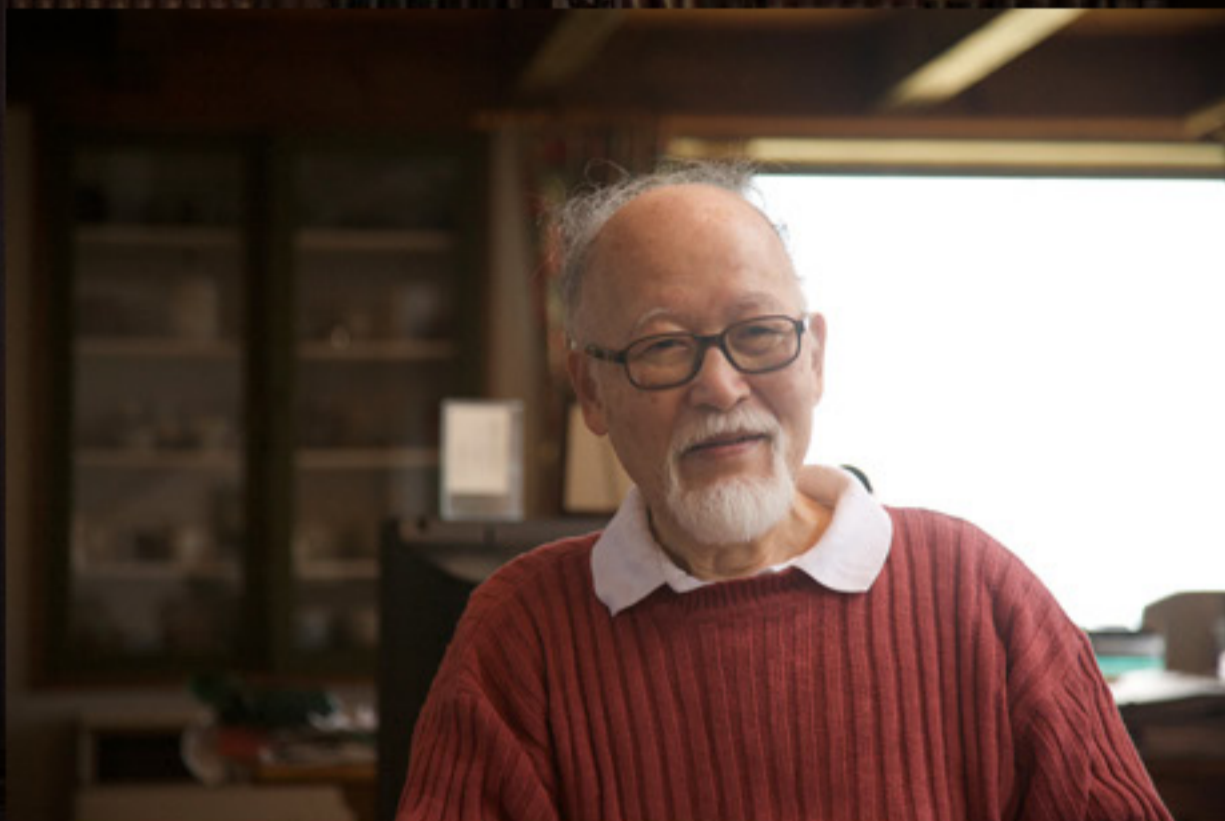
一般教育の教員も開学直後の大学とは思えないような充実ぶりをみせた。神山四郎（歴史学/慶應義塾大学名誉教授）、佐藤昭夫（美術/東京国立博物館学芸部長）、長尾昭哉（経済学/筑波大学名誉教授）、阿南成一（法学/筑波大学名誉教授）、山本修（化学・自然科学概論/通産省工業技術院科学技術研究所基礎化学部長）、寺田美奈子（生物学/早稲田大学副手）といった個性的な研究者たちが名を連ねた。古田自身も哲学の授業を担当した。また、教員のなかには、当時31歳だった矢内義顕（宗教学）など若い講師もいた。

基礎専門科目でも、神山四郎が「比較文明論」を担当し、長尾昭哉は「組織内コミュニケーション」を教えた。古田の理想と人脈によって集まってきた才能によって、深みのある一般教育と異文化コミュニケーションの学びが有機的に絡み合うカリキュラムが始動したのである。

(10/15)

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



外に開かれた異文化コミュニケーション研究所。
権威に屈せず、若い才能を発掘する。

神田外語大学の開学と同時に、異文化コミュニケーション研究所は大学附属の研究所となり、本部を大学内へと移した。研究所は、開学2年目の昭和63（1988）年4月、ニュースレター『異文化コミュニケーション』を創刊する。年3回発行され、研究者たちの寄稿文、研究所が開催する講演会やセミナーの報告や感想、そして学会や他大学のイベントなど研究所以外の動きも掲載された。ニュースレターは全国の大学学長や研究機関、研究者、図書館などに無償で送付された。その数は、数百通に上ったという。キーパーソンをターゲットに送られたニュースレターは、異文化コミュニケーションを日本のアカデミズムに浸透させていくうえで大きな役割を果たした。



神田外語大学の附属機関となった異文化コミュニケーション研究所だが、大きな特徴は外に開かれた研究機関であることだった。その特徴を表現するのが昭和63年から発行が始まった紀要『異文化コミュニケーション研究』である。日本で初めての異文化コミュニケーションに関する研究誌だ。編集方針も画期的で、毎号、神田外語大学の教員の論文は1本ほどで、それ以外は国内の他大学、海外の大学や研究機関の研究者が投稿した論文である。この分野を研究している者であれば誰でも投稿できるシステムが採用されており、掲載する論文を選ぶ編集委員も古田と久米以外は他大学の研究者で構成された。それゆえ、執筆者も、助教授や非常勤講師、大学院生など、若い研究者たちが多かった。



一方で、どれほど著名な学者であっても、掲載の価値がないと判断すれば、ポツにした。古田のもとで編集に携わっていた久米はこう証言する。

「日本の大学では偉い先生の論文は内容に関わらず掲載するものですが、古田先生は絶対にそれはせずに、スパッと切られた。相手がどれだけ名のある著名な方であっても、怒っても態度を変えず、妥協しませんでした」

意欲のある若い研究者たちに発表の機会を与えようとする古田の理念と編集者としての手腕により、『異文化コミュニケーション研究』への投稿は年々、増えていった。そして、古田を異文化コミュニケーションの世界へと引き込んだエドワード・C・スチュワートもアメリカから論文を寄稿した。(11/15)

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



泊まりがけで同志と語り合う夏期セミナーが
新たなる「多文化関係学会」を誕生させた。

神田外語大学が開学した当時、「異文化コミュニケーション」の講義をカリキュラムに組み込んでいる大学は数えるほどしかなかったという。

「異文化コミュニケーション」を学生たちに教えるには、科目を教えらるる教員が必要となる。教員自身も「ファカルティ・デベロップメント」と呼ばれる研修を欲していたのである。異文化コミュニケーション研究所では研究者たちを対象にした「幕張夏期セミナー」の開催を始める。第1回は平成3（1991）年9月13日から15日にかけて開催された。テーマは「日本の大学における異文化コミュニケーション論の教育と方法」。全国から30数名の研究者が集まり、3日間にわたる講義と議論が行われた。古田のもとでセミナーの実務を取り仕切った久米は当時の様子をこう振り返る。

「参加した先生方のうち、異文化コミュニケーションの専門家はほんの数人で、それ以外の先生方の専門は、歴史学や社会学、哲学、国際関係などさまざまでした。先生方はそれぞれの分野で、『いくらやっても世の中は変わらない』という行き詰まりを感じていたようです。閉塞感を打破するために、今まで知らなかった異文化コミュニケーションを学べば、何かおもしろいことができるのでは、と考えている先生方が集まっていた」

この夏期セミナーは宿泊形式をとったことで、参加者の交流も深まり、全国の研究者たちの結束を固め、異文化コミュニケーションを広めることにも一役買ったのである。



その後も夏期セミナーは続き、平成7（1995）年からは会場を福島のブリティッシュヒルズに移した。中世英国のまさに異文化の環境のなかで研究者たちは活発な議論を交し、休憩時間にはビリヤードやテニスを楽しみ、ライブラリーのソファでリラックスしながら語り合った。この時期になると参加者も増え、講師を含めて70名という受け入れの限界にまで達していた。久米によると、このセミナーでの自由な議論が契機となって、新しい学会を求める声も上がった。その有志たちによって、平成14（2002年）に異文化コミュニケーションをテーマとする「多文化関係学会」が立ち上がったのである。初代会長には当時、神田外語大学の学長を務めていた石井米雄が就任した。（12/15）

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



**異文化理解を学び旅立った卒業生から、
現代社会の課題と立ち向かう研究者も生まれた。**

異文化コミュニケーション研究所では首都圏以外の地域の大学に勤める研究者が、活動の打ち合わせのために上京する際の交通費を補助した。宿泊も神田外語大学内の施設を利用することができた。移動と宿泊という最低限の経費を負担し、熱意のある研究者同士の活動を後押しした。結果として、研究所の古田暁や久米昭元が中心となりつつ、南山大学（愛知県）教授の岡部朗一や桃山学院大学（大阪府）教授の遠山淳らが参加した『異文化コミュニケーションキーワード』や『異文化コミュニケーション・ハンドブック』（ともに有斐閣）といった出版物も実現したのである。

このほかにも、大学におけるコミュニケーション教育の現状調査、異文化コミュニケーション教育のためのビデオ制作、用語集の編集、テーマ別の研究会、大学内での講演会、異文化コミュニケーションの専門書を揃えた図書室の整備などが行われた。大学の枠にとらわれない活発な活動によって、異文化コミュニケーションという学問は日本全国の大学に広まっていった。その原動力となった神田外語大学附属 異文化コミュニケーション研究所の活動には、社会運動のような「熱」があったのである。

「異文化コミュニケーションの能力は、グローバル化が進む現代社会で最も必要とされる能力と言えるでしょう。神田外語大学を卒業して、コミュニケーションを学びにアメリカの大学に留学した卒業生も数多くいます」



久米は神田外語大学における異文化コミュニケーション教育の成果についてこのように語っている。また、開学直後の神田外語大学で学んだ数多くの卒業生のなかには、現在、京都大学准教授をしている岩隈美穂がいる。岩隈は1992年に英米語学科を卒業後、アメリカに留学し、コミュニケーションの学位を取得した。平成20（2008）年からは京都大学の大学院医学研究科で「医学コミュニケーション」という講座を教えている。「医学と社会をコミュニケーションでつなぐ」ことを目的としたこの領域の講座が設置されるのは日本で初めてのことである。新しいコミュニケーション研究の領域で高い評価を受ける岩隈の存在は、古田暁が永年思い描いてきた「異文化コミュニケーションによって若い世代を教育し、社会を変革していきたい」という理想が結実しつつあることを予感させてくれるものと言えるだろう。（13/15）

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



**勉強して無駄ってことはないですね。
必ず生きてきます。いつ始めてもいいんです。**

古田暁は、平成11（1999）年3月に神田外語大学を定年退職となり、異文化コミュニケーション研究所の所長も退任した。後任の所長には、当時の学長だった石井米雄が就任した。平成13（2001年）、神田外語大学に国際コミュニケーション学科が設置された。その翌年の平成14（2002）年3月、古田は学術顧問としての役割を終え、約20年間にわたり奉職した佐野学園を離れた。



ひとりの研究者に戻った古田は中世の修道院の世界を紐解く翻訳に打ち込んだ。平成12（2000）年には『聖ベネディクトの戒律』（すえもりブックス）が翻訳出版された。これはカトリック最古の修道会の戒律を原文のラテン語から日本語へ翻訳したものである。平成19（2007）年には『祈りと瞑想 カンタベリーのアンセルムス』を翻訳出版した。昭和55（1980）年に出版した『アンセルムス全集』には含まれていなかった祈りと瞑想（祈祷集）の翻訳である。この翻訳によって、古田は博士論文のテーマとして選んだアンセルムスの全作品の日本語翻訳を終えた。40年以上の歳月をかけた偉業であった。

平成20（2008）年、古田は脳溢血で倒れた。平成22（2010）年には岩手県に移住し、現在はリハビリに励んでいる。平成23（2011）年の夏、岩手県に古田を訪ねた。岩手山を臨む大きな窓のあるリビングには古田の大好きな本がいたるところに積まれている。古田は、こんなことを話してくれた。

「佐野さんは、普通と違う。だからうまくいった。気が合ったんでしょうな。あちらもそうだし、こちらもそう。いろんな点からうまくいったんですよね。佐野さんにとっては、私のような人間がいるんでよかったし、私にとっては佐野さんのような人がいたから本当に生き延びることができたんですね。不思議なものですよ、物事っていうのは。あれだけの人ってのは、なかなかいるもんじゃないですよ。感謝してますよ、今でも。

面白いですね、人間っていうのは。本当に。いろんなところで、いろんな人と出会って、それで何かを身につけていくんですね。役立っているんです。本当にそれらは全部なくちゃダメだったんでしょうね。どっかで出会うんですよ。神田に出会えたっていうことが大きいですよ。

(14/15)

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



一般教育ってのは普通、一般の生徒にとっちゃつまらない分野でしょうね。でも、やっぱり、それがなければ何をやっても深みがないんです。全然しゃべる内容がない。（一般教育の大切さが）後から分かった学生もいるでしょう。そのときには分からなかったでしょう。それでいいんですよ。

これだけいい機会があるのになぜ勉強しないかっていうこと。つまらないからって、つまるために、他のものがつまるために、それなりに勉強しなくちゃいけない。どっからでもいいです。深く、深くやれば、何でも面白くなります。だけど表面だけ触ってても面白くないです。

だから、哲学だとか、宗教ってことになっていくわけでしょ。深く、深くやれば、必ずどっかでぶつかります。なぜ難しいかっていうと、それだけ深いからです。それをやらないのももったいないですよ。もったいないです。こんないい機会。日本のような場所で、だって回り見たって、宗教、いろんな宗教あるじゃないですか。どの時点で出会うにして、宗教に深く出会う。これが大事なんですよ。ね。（人生が）まったく変わっちゃう。

勉強して無駄ってことはないですね。必ず生きてきます。どっかで生きてくる。本当に、みなさん、どうぞ勉強を。いつ始めてもいいんです。



私は若い人たちがとても好きです。大好きですね。必要なものというのは、やはり両方にとって必要だからでしょう。教える方と教わる方の両方に。

（20年も神田で働くなんて）思ってなかったです。今でもまた呼ばれたら行きますよ。」（15/15）



古田 暁（ふるたぎょう）

昭和4（1929）年、米国ロサンゼルスで生まれる。生後まもなく日本へ移り、終戦後の昭和20年代初頭にアメリカに渡る。以来、約20年間にわたり、欧米で中世の神学や哲学などを学び、昭和39（1964）年アメリカ・カトリック大学で神学博士号を取得。昭和40年代半ばより日本での生活を始め、『英文日本大百科事典』の編集では編集主査を務める。昭和59（1984）年に佐野学園附属の異文化コミュニケーション研究所所長に就任。昭和62（1987）年、開学した神田外語大学の教授に就任。平成11（1999）年に定年退職となり、平成13（2001）年より名誉教授。平成15（2003）年12月、日本国籍を取得。平成25（2013）年4月永眠。享年84歳。

異文化理解教育の先駆者たち

第1回 古田暁 神田外語大学名誉教授
・異文化コミュニケーション研究所初代所長
異文化コミュニケーションの夜明け



出版物一覧

井上靖著/古田暁、ゴードン・セイガー訳"Journey Beyond Samarkand" (講談社インターナショナル、1971年)

リチャード・ド・ベリー著/古田暁訳『書物への愛フィロピブロン』(大阪フォルム画廊出版部、1972年)

リチャード・ド・ベリー著/古田暁訳『書物への愛フィロピブロン(フランス装丁版)』(北洋社、1978年)

アンセルムス著/古田暁訳『アンセルムス全集』(聖文舎、1980年)

シセラ・ボク著/古田暁訳『嘘の人間学』(TBSブリタニカ、1982年)

C.モリス著/古田暁訳『個人の見見』(日本基督教団出版局、1983年)

泉治典・渡辺二郎編(共著書)『西洋における生と死の思想～西洋精神史入門～』(有斐閣、1983年)

里野泰昭編(共著書)『ヨーロッパ文化の源流～異文化理解の視点～』(有斐閣、1984年)

リチャード・ド・ベリー著/古田暁訳『書物への愛 フィロピブロン(特装版)』(タングラム、1985年)

国際クリスチャン教授協会編（共著書）『神秘主義と現代』（星雲社、1986年）

古田暁著『人間であること、人間となること 日本人にとって神体験とは』（聖文舎、1987年）

古田暁監修/石井敏、岡部朗一、久米昭元著『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件』（有斐閣、1987年）

リチャード・ド・ベリー著/古田暁訳『フィロピロン 書物への愛（文庫版）』（講談社、1989年）

古田暁、石井敏、岡部朗一、平井一弘、久米昭元著『異文化コミュニケーションキーワード』（有斐閣、1990年）

G.P.スケープランド編/古田暁編訳『世界文化情報事典 ～カルチャーグラム102～』（大修館書店、1992年）

古田暁監修/石井敏、岡部朗一、久米昭元著『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件[改訂版]』（有斐閣、1996年）

聖ベネディクト著/古田暁訳『聖ベネディクトの戒律』（すえもりブックス、2000年）

聖ベネディクト著/古田暁訳『聖ベネディクトの戒律（ポケット版）』（ドン・ポスコ社、2007年）

アンセルムス著/古田暁訳『祈りと瞑想 カンタベリーのアンセルムス』（教文館、2007年）

このほか、神田外語大学 [異文化コミュニケーション研究所](#)発行の紀要『異文化コミュニケーション研究』にも古田暁名誉教授の論文が掲載されています。

詳しくはこちらをご覧ください。[掲載論文題目一覧](#)